

次はこちらの番だろう。うるさい艦をやっつけてしまえば後はウサギのような輸送船。その夜は幸い他の船がやられ、わが船は助かる。

今夜はいよいよこの船の番だと覚悟を決める。二十時半ごろ「ビリビリ」と来た。やられた。船は全速で走っている。しばらくは大丈夫だ。三番船倉に音がする。ふと見ると、横腹から、ものすごい勢いで水が噴出する。ビルマからの担送患者の船倉だ。正に地獄だ。どうすることもできない。船足は次第に遅くなり、悲しい汽笛がなり響く。やがて船尾から次第に海水に洗われる。ほとんど停止しかけた。

「飛び込め」候補生仲間は一斉に飛び込んだ。中に金槌が数人いた。これはカポークのお蔭で浮いたので泳げるやつが引張った。随分泳いだつもりが、実際は二、三〇分くらいのものであったろう。ふと振り返ると船は立っていた。そして「スーッ」と海に消えて行った。船をはなれきれなかった人々を呑みこみながら。壮者も患者も御遺骨も慰安婦たちも皆海の藻屑となり果てた。幾人かが十八時間くらい後、海防艦に救助され二日かかっ

て海南島の三亜にたどりついた。

## ビルマ作戦の思い出

### 包囲された将校斥候

福岡県 下川真三

召集令状という夢にも思ったことのなかったハガキを受け取ったのは五〇年前の宵、会社の宴会で、飲み、食い、騒いでいた時であった。何のための宴会であったかは覚えていない。

一瞬酔いが冷めて、いそいで下宿に帰り、身辺の整理を深夜までしたが、不安と興奮で眠れず、朝を迎えたことを覚えている。

駅頭で会社の楽隊の勇ましい音楽、技師長の音頭による万才の声、のぼり、日の丸の小旗の波に送られ車上の人となる。

上津荒木の民宿で、はじめて会った二人の戦友、生まれて初めてさわる軍馬との対面。慌ただしい実戦訓練、

肉親との面会、門司での乗船。上海上陸、広い麦畑の中支、バイアス、広東、海南島の南支、マレー、シンガポール、ビルマ、と転戦の五年間。その間のいろいろな思い出の隅々が少しずつ浸食されて、適確な記憶が次第に薄れてきて、あの事はどこで起きたのだったか、誰とやったことだったか等々。

ただし、この思い出の中で、ただひとつ私には昨日の出来事のように鮮明に、景色が、音が、すべての事が、心の深く深く焼き付いて、五〇年を経た今でも少しも色あせない思い出がある。それは、ビルマでのあの日の数時間の逃避行。そう残念だが全くの逃避行である。

その朝、小隊長・分隊長・班長・衛生兵を含めた兵数人は、昨日までの連日の軍馬を引いての行軍とかわり、今日はトラックに乗車しての将校斥候だった。本隊が明日から進むであろう、道路状態の偵察任務との、小隊長の説明のあとトラックに飛び乗った。みんな少しハシヤギ気味で軍歌などハミングしながら畑をこえ森を抜け、丘を越して進んだ。道が二つに分かれた、小隊長は地図を見て「右へ」と指示された。

また、丘の道を進むと広々と開けた畑地へ出た。なにも植えてない、戦争のためだろう、耕してはある、道はゆるい下り坂となり、道の両側は排水と灌漑のための浅く広い溝が掘ってあって、その両岸に丈の高い雑草が所々に生え茂っている。

しばらく行くと今度は道が上がりとなり、畑が次第に狭くなり道は丘の中へ行く。その丘へのかかりのところにバリケードを見つけた。我々は敵が退却の際に取付けたものだろうと思いきみ、トラックをバリケードの直前まで進め、トラックから飛び降りて、バリケードを取り除こうとした瞬間、右前方の丘の建物からチェッコ機関銃の乱射を受けた。我々は左の溝に跳びこみ、散開して敵方向にかまえた。ただ一丁の我が方のチェッコ機関銃も射撃準備ができ、戦う命令をまった。

と突然トラックが大音響と共に爆発し黒煙を吹き上げて。迫撃砲弾が命中したのだ。シマッタと思って、交戦してどれぐらいたったか、機関銃手が被弾即死。息をすするまもなく二人目の重傷者が出た。衛生兵の懸命の看護の甲斐もなく絶命。二つの死体を草むらに安置し、武器

を回収して、我々はずいに後退せねばならなかった。我々は敵状は友軍に知らせねばならぬ任務がある。にげるのではないと心にいい聞かせた。

溝の中を一人が三、四〇呎疾走し、伏せて、後続の者を待つ、安全を確認してまた走る。何十回かこれを繰り返した。敵は少しずつ道路の向こう側の溝の中を進み、ジリジリと我々に近づいてくる。溝が切れて（ここが畑の一番低い所）もうどうしようもない。

畑を走ればネライ打ちにされる。ここで敵に立ち向うばかりだと決心した。このとき遠くの空に飛行機の爆音をかすかに聞いた。音は次第に太くなり、やがて機影が空の高い所にあらわれた。我々の方へ向かって近づいてくる。速い、友軍の飛行機だ敵の射撃が止まった。追ってきていた敵兵も丘へ帰り始めた、助かったと思った。小隊長の太い声がとんだ。「班長この状況を友軍をみつけて報告しろ」若くて元気な班長はいっさんにかけて行った。飛行機は高度が高く、またたくまに機影は青空に消え爆音も聞こえなかった。

また、敵の掃射が我々に向けられ始めた。伏せたまま

で敗因を考えた。状況説明では、敵は逃げたあとだといわれた。ただし、バリケードを発見した時点での慎重さを欠いていたのだ。二人死なせた慚愧が胸をかきむしる。班長は無事友軍に連絡できた。だから雲一つない青空で太陽は大分西に傾いてきたが、まだ強い直射日光は鉄兜を焼き、後頭部が耐え難く痛む。こらえきれなくなつてソット寝返って上向きになる。

しばらくすると口唇から水気がなくなりヒリヒリしてくる。またうつ伏せになる。何度繰り返したか、日の暮れまで体力が、精神力が耐えられるか。ひと思いに走りだしたい衝動にかられる。走れば九死に一生を得るかもしれないと思う心が次第に強くなってくる。

そのとき突然に側方の丘から力強い日本軍の軽機の音がけたたましくしだした。そしてカン声、友軍だ。助かるぞ、目の前があかるくなった。涙がかわききつた畑の土を少し濡らした。

敵の射撃はこちらにはこなくなった。彼我の銃声はますます激しく、重機の音もまじって聞こえてきた。「走るぞ」小隊長の声、立上りざま走った。息の続く限り走

りに走った。

本隊の迎えを受け、宿舎に帰り着いたのは残念ながら記憶にない。朝になってのどの痛みで目覚めた。全身に痛みを感じ、力が抜けて動けない。生の喜びと戦死させた二人の戦友を思う悲しみ、大きな涙が次から次へと止まらなかった。

丘の戦闘は野砲の参戦でやっと夕刻には終わったと聞く。敵は大部隊だったのだろうか。その夜も死んだように眠った。次の早朝、敵の去った跡に急行し、二人の遺体を収容、荼毘に付して、二基の墓を作った。本隊はすでに本来の輸送任務について前進しているだろう。ニガニガしい敗走の思い出、忘れられるなら一刻も早く忘れてしまいたい。

## ただ一途にお国のため

福井県 柴田 伊左衛門

大東亜戦に遭遇して

昭和五年満二十歳で私は徴兵検査を受け、第二乙種で第一補充兵役陸軍輜重輸卒（服役期間十二年四か月）に編入となった。そこで直ちに在郷軍人会に入会「教育勅語」中の

一旦緩急アレバ義勇公に奉ジ以テ

天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ

を精神としてその覚悟を新たににした。

そのころ我が国の外交関係とみに悪化し、ついに昭和十六年「宣戦の布告」となりさらに戦陣訓が出されて、その一節に

夫れ先陣は大命に基き、皇軍の神体を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、云々……  
生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すことなかれ

と書かれており、未入営補充兵ながら何かしら奮いたたされたものである。

やがて国を挙げての戦時態勢に突入、町では防空演習から灯火管制など訓練が繰り返され、特に私は教育召集とて、敦賀連隊に三泊四日の宿泊訓練もあって大いに武